経済研究
Vol. 57, No. 3, July 2006

【書　評】

小　島　清

『雁行型経済発展論(第1巻)』
——日本経済・アジア経済・世界経済——
文眞堂　2003.5　ix＋353ページ

『雁行型経済発展論(第2巻)』
——アジアと世界の新秩序——
文眞堂　2004.3　xiv＋361ページ

社会科学に進歩があるとすれば，それは，何によってもたらされるか．人間の社会的な活動を支える原理の探求と，その原理によって生まれる活動を表したデータの入手と解析．人間行動の観察による行動パターンの摘出と，その再生性を仮定した予測．それらを精緻化していくことを，仮に「進歩」と呼びうるとすれば，である．

本書，『雁行型経済発展論』第1巻，第2巻を通読したときの感想は，上記のようなものであった．

巻末に記載された小島清教授の生年が，1920年であることに率直に驚嘆し，まずは慶賀の意を表したい．傘寿を過ぎて，なお，若々しい論考を発表し，問題提起を続ける小島教授に，学会からは賛嘆と羨望の声が共鳴していることであろう．評者は，大学院生時代に拙稿を小島教授にお送りさせて頂いて以来，研究への丁寧な論評を頂いてきた．また，その際には，小島教授ご自身の論文を返送して頂き，常に，小島教授ご自身の論考への批判を求められた．評者のみならず，小島教授の柔和なお人柄に触れ，国際経済学の地平の広がりを体感した研究者も多いのではないだろうか．

そのゆえにこそ，本書の書評依頼が，一橋スクールの「門外漢」である筆者に回ってきたものとも想像できる．柔和な碩学の著作に，書評という形の傷跡を残すことを好まない一橋スクールの弟子たちの配慮が，筆者に，本書との対話を求めたのかもしれない．評者も何回か書評を固辞したが，頑健な編集担当者に押し切られた感もある．

本書との対話のなかで，評者が提起したい問題は，四つある．第一は，20世紀における歴史哲学の発展について，第二は，イノベーション普及学と貿易理論との非接合について，第三はタイプ分類の恣意性について，第四は地域経済統合への規範理論の意義について，以上の四点である．(以下，敬称を略す．)

歴史哲学

雁行形態論を提起した赤松が，歴史哲学として認めていたものはヘーゲルの弁証法であった．第二次世界大戦前の学問状況におけるドイツ歴史哲学と日本経済史との近接性を思うとき，それは当然の教養であり，マルクス主義経済学とは距離を置いた歴史理解の一方法であったかもしれない．小島は，ヘーゲリアンたる赤松の雁行形態論に依拠しながら，日本の貿易パターンについて実証を行い，その論理を海外直接投資に敷衍した．山澤逸平，トラン・ヴァン・トゥといった一橋大学を中心とした後進の研究者らによって，21世紀に至るまで，雁行形態の「実証」が行われ続けている．東南アジア，中国における産業発展の実証研究という現実的要請が，その背景にあった．日本をはじめとするアジア諸国のキャッチングアップ・プロセスの理解に，雁行形態論は不可欠の導入的論理となってきた．

第二次世界大戦終了前に赤松の論考が発表され，そして，一橋大学の貿易論研究者による貿易数量のプロットが続けられている間，歴史哲学においては，画期的な問題提起がなされた．その中心に位置づけられるのは，ポッパーによる『歴史主義の貧困』であり，それに続く，カー，クーン，ポランニーらによる歴史と科学史理解への示唆であろう．それは，1960年代の大きな転換であった．

ポッパーは，歴史に法則性を認めることを諫めている．ポッパーであれば，貿易統計のなかのある部門において，一定のカーブが観察されたとしても，それを「歴史法則」とは認めない．いわんや「発展」ではありえない．恣意的に，あるいは，アドホックに選択された貿易数量カーブから，何らかのパターンが観察されたとしても，それを「歴史法則」と呼ぶことはなく，経済「発展」の証左とすることもできない．貿易データから，時系列曲線を描き，そこから特定のカーブが摘出されるか否かを統計的検定にかけるという実証的作業を試みる必要があるのだが，雁行形態論の実証レベルでは，統計データの恣意的選択という批判を排除できない．

ポッパー以降の歴史哲学を知る研究者にとって，貿易統計データを時系列でプロットし，そこに「形態論」があると主張することには，いくばくかの勇

気を必要とする.「形態論」が,「歴史法則」なのか,「発展」のパターンとして普遍的なものか,といった議論に足をすくわれ,時間を消耗することを忌避するからである.

雁行形態論が世紀を超えて存続してきた理由を門外漢に理解せしむるのは,むしろクーンのパラダイム論であろう.すなわち,赤松によって提起された一つのパラダイムを,一橋スクールという「学派」が,クーンの言う意味での「通常科学」として受け止めてきた,という事実であろう.一橋大学の貿易論で職業的ポジションを得るうえで,あるいは,一橋大学の博士号学位を取得しようという野心をかなえるうえで,雁行形態論は,利用しやすい明快な命題ではなかっただろうか.論文作成の時間が限定されたとおぼしき国際コンファレンスで,必ず「Flying Geese Model」が登場するのは,統計的な検定を経ないまま「パターン」を提示することが許されるからである.数理統計的な教養のない者でもデータを処理できるという,研究者の「逃げ道」として機能してきた可能性も高い.クーンのいう「通常科学」では,その科学に身を投じる人々による制度化という特徴を持つ.大学での学位取得と教授職への一つの道として機能することこそが,「通常科学」の役割でもある.

イノベーション普及学

S字型のカーブに,強い関心を寄せてきた学問も,ある.それは,ロジャース(E. M. Rogers),マンスフィールド(E. Mansfield)らによるイノベーションの普及に関する研究である.ベルヌーイ型の微分方程式の解は,ロジスティック曲線として与えられ,その時点間の差分をとれば,「雁行」に近いカーブを得ることができる.興味深いことに,「歴史法則」を否定した社会科学が,時間(t)を横軸とした分析を許容し,そして広範に展開してきたのである.ロジャースによれば,イノベーションの普及に関する研究は,1950年代後半の農業経済学における実証研究からはじまっている.

経済発展のフィールド調査と深い関連を持つイノベーション普及学と,雁行形態論による貿易論とは,接合されてこなかった.雁行形態論は,歴史法則を主張するものでもなく,イノベーションの国際的な普及について適用されてきたわけでもない.繊維産業,機械産業,自動車産業などについて雁行形態とみなされる貿易数量のプロットが行われてきたにもかかわらず,それを,イノベーションの国際的普及という文脈から読み取ることはなかったのである.

イノベーション普及学と雁行形態論の発展には,注目すべき質の違いがある.イノベーションの普及に関する研究は,なぜS字型のカーブが生まれるのか,という問いに対して,インフォーマントの存在と,人々の模倣スピードの差という答えを準備している.小島の雁行形態論では,その形態が観察された産業の内部に立ち入って,産業組織的観点から分析することはない.貿易数量のカーブは,産業としての集計量であって,個々の企業の生産数量の変化を,生産技術の伝播スピードとして分析したものではない.イノベーションが異質性を求める活動である以上,個別企業によるリーダー的役割と,その模倣者とを特定することが重要になるが,小島の研究に,個別企業の名前はでてこない.

貿易理論の経済学は,産業・企業・技術の実証に基礎を置いた経営学と結びつこうとしている.イノベーションの経営学と貿易理論との接合は,その一つの可能性であるように思われるのであるが,雁行形態論という抽象的レベルで,それが可能になるとも思えない.修飾語句が過剰であるとき,思考は厳密ではなくなるからである.

タイプ分類

小島による修飾語句とタイプ分類は過剰である.小島のタイプ分類は,後進の研究者によって再整理されるべき対象としての煩雑さを加えている.「合意的国際分業」,「逆貿易志向的直接投資」,「順貿易志向的直接投資」,「小島第1モデル」といった用語法は,そのタイプ分類によって思考が節約されるのではなく,むしろ,その意味を精査する必要のある曖昧さを提起している.これらタイプ分類の主体が企業であるのか,産業であるのか,企業間関係であるのかを想定するならば,その曖昧さを理解できよう.また,「志向」するものの主体的意図や,経済合理性に導かれた行為の結果とが「型」として混同されている,とも言える.たとえば,誰が,何を「合意」できるのだろうか.

こうしたタイプ分類は,小島が自らの著作で用いる以外,ほとんど他の研究者によって用いられることがない,と評者は認識してきた.しかしながら,本書のなかで,これらの概念を用いた何人かの日本人研究者の論文が紹介されていたことは驚きであった.かつて筆者は,小島による「アメリカ型直接投

資」と「日本型直接投資」というタイプ分類を批判したことがある．筆者の論考への批評として最も多かったのは，「小島によるタイプ分類を批判することに何の意義があるのか」，というコメントであった．すなわち，小島によるタイプ分類は，そもそも批判の対象とするべき研究なのか，というコメントが多かったのである．

タイプ分類は，思考過程を集約して表すという効果を持つ．しかしながら，あまりに多数のタイプが提起されるのであれば，そこには，思考の分散があるのみで，本来の効果である思考の集約化と共通理解の提示ということが，行われにくくなる．小島による貿易理論は，ゲーム理論の応用という水準に達しないタイプのものであり，その内容を端的に表現すれば一次同次の生産関数による静学分析と取引費用理論との接合である．雁行形態を考察するうえで，内生的経済成長論や産業クラスターの形成といった要因を視野に含めることもできたのではないだろうか．

地域経済統合への規範理論

小島の立論には，理論分析ないし実証分析による命題と，「かくあるべき」という規範理論とが混在している．たとえば，第2巻第7章「世界経済の新秩序」には，下記のような記述がみられる．「かくて，GATT第24条は撤廃され，多角的無差別の自由貿易原則への重大な例外は排除すべきである．もしそうでなければ，大陸型地域統合をはじめすべての2国間ないし複数国間FTAはopenにすべきである．」(第2巻，262ページ．)

誰が，それを行いうるのかについての理解なしでなされる規範的命題に，どのような意義があるのか．国際的な組織間における交渉の力学を考えずに，「ベキ論」を記述することに，どのような意義を認めるべきなのか．「猫の首には，鈴をつけたほうがよい」というベキ論を議論している鼠の例えのごとく，評者にとっては，理解しがたい記述である．

評者の主観としては，学者が規範的理論を述べるのは，自らの研究成果の含意ないしは文脈としてのみである．そのためには学術的論文の表現に対して禁欲的でなければならない．しかしながら，小島には，自らのベキ論を実現する官僚の存在が明確に意識されているようですらある．

貿易理論へのインスピレーション

国立(くにたち)の森には，雁が飛ぶ．貿易数量を時系列にプロットして，その形を「雁行」と認識する心理テストに合格した人々は，なぜか一橋大学に多かった．貿易数量の変化は「秋の月夜に雁が列をなして飛んでゆく」(第1巻，12ページ)形態だと説明されているのであるが，そのような雁を観てしまうことが，幸福であるとも思えない．学問的な先入主は，「なぜ」という問いをおろそかにするからである．雁行形態を，キャッチングアップ・プロセスと同一視することも，やはり危険である．媒介変数の説明を十分になしえないこと，先進国の新産業においても同様のカーブが観察されうること，そして，雁行形態を示さない産業に関する研究が，おざなりになる可能性もある．

蛍の舞う姿を見ることが難しくなった日本と同じように，雁の飛ぶ姿を主張する研究者も，珍しくはなってきた．評者は，蛍を見たときと同じように，珍しく，また，懐かしい存在として，雁を観る研究者を見る．それは，雁行形態という怪しげな，そして，柔らかな概念によって，数理的貿易モデルも，統計解析も，直接投資の理論も知らない学生であった評者を学問にいざなう効果があったからかもしれない．

「雁行形態論」は貿易理論のインスピレーションとして機能してきた．一橋大学の貿易論講座のアイコンとして機能してきた以上に，貿易と直接投資を考える人々への導入の役割を果たしてきたのである．小島清教授は，実証的データの整理と，その理論的解釈の提示において，「雁行形態論」の擁護に中心的な役割を果たしてこられた．

小島教授によって直接投資のマクロ理論が提起されて以来，二十数年の時がたった．評者にとって興味深いのは，貿易数量の時系列曲線の背後にあるミクロ経済と企業経営のメカニズムである．歴史哲学，イノベーション普及学，地域経済統合への組織論的分析の意義を考えるならば，それらの知的興奮度のほうが，評者には高い．

ミネルヴァの森のふくろうは，日暮れて羽ばたく，という．ヘーゲルのごとく知性の象徴をふくろうに求めるか，あるいは，雁に求めることも可能なのか．社会科学に進歩があるとすれば，それは何によってもたらされるか．

［洞口治夫］